



令和3年10月19日

報道機関 各位

熊本大学

アメリカでの熊本洋学校の教師人選に関する 一次史料を発見

(ポイント)

- 明治4年（1871）9月に開校した熊本洋学校^{くまもとようがっこう}の外国人教師について、その人選が約一年前からアメリカで行われていた事実を示す書簡が、熊本大学所蔵の「幸家文書」^{ゆきけ}より発見されました。
- この事実から、熊本洋学校の教師探しは、アメリカで早期に着手されながらも、明治4年8月のジェーンズの赴任に至るまで、難航した様子が見えます。

(記者発表について)

本研究成果について、Zoomを利用して詳細を説明する機会を以下のとおり設けます。参加を希望される場合は、熊本大学総務部総務課広報戦略室まで、メール（sos-koho@jim.kumamoto-u.ac.jp）でご所属とお名前をご連絡ください。折り返し詳細をご連絡いたします。

〈日時〉 令和3年10月26日（火）10:00～11:00

※恐れ入りますが、準備の都合上、10月25日（月）17:00までにご連絡願います。

(概要説明)

熊本大学永青文庫研究センターの今村直樹准教授は、熊本洋学校の外国人教師の人選が、明治3年9月からアメリカで行われていた事実を示す書簡を発見しました。この新出書簡は、熊本藩留学生としてニューヘブレンに滞在中の津田静一^{つだせいいち}（1852-1909）が、日本にいた父の山三郎^{さんざぶろう}に宛てた一次史料です。この発見により、アメリカでの洋学校教師の人選が、熊本藩の依頼を受けて早期に着手されていたこと、それに現地の熊本藩留学生が深く関わっていたことが、初めて確認されました。

(説明)

[背景]

明治3年6月、熊本藩では新しく知藩事ちはんじに就任した細川護久ほそかわもりひさのもと、横井小楠よこいしょうなんの思想的系譜をひく実学党じつがくとうが政権を掌握し、藩政改革が進められました。改革は文教政策にもおよび、翌7月には藩校時習館じしゅうかんが廃止されました。以降、熊本藩では西洋の学問教育の振興を図るため、洋学を学ぶ教育機関(洋学校)の設立準備に着手するとともに、外国人教師の雇い入れが計画されました。その頃は全国でも、洋学校の開設が進められていました。

熊本藩の洋学校設立準備に尽力したのが、小楠の甥である横井大平よこいだいへい(1850-1871)です。大平はアメリカへの留学経験を持ち、恩師であるキリスト教オランダ改革派教会の宣教師フルベッキに働きかけ、外国人教師の招聘をはかろうとしました。当時、東京にいたフルベッキが、アメリカの同教会外国伝道局のフェリスに宛てた明治3年7月24日(1870年8月20日)付の書簡によると、大平から熊本藩が外国人教師として米国陸軍の退役軍人を求めている旨の申し出を受けたため、アメリカでのその人選をフェリスに依頼しています(高谷道男編訳『フルベッキ書簡集』新教出版社、1978年)。しかし、それに対するフェリスの回答はなく、同年10月17日(1870年11月10日)付のフルベッキ書簡では、急ぎの回答をフェリスに促しています(前掲『フルベッキ書簡集』)。また、前述の明治3年7月24日付のフルベッキ書簡では、大平がアメリカ留学中の兄左平太さへいた(1845-1875)に対しても、退役軍人招聘の件で手紙を書く予定だと記されています。しかし、フルベッキや大平の依頼を受けて、アメリカで実際に人選が行われたかどうかは、これまでは未解明のままでした。

[研究の内容]

今回発見された書簡は、熊本藩留学生としてアメリカ滞在中の津田静一が、東京にいた父山三郎に宛てた明治3年9月21日(1870年10月15日)付のもので、静一は、明治2年10月にイギリス留学のため横浜を出発しましたが、予定を変更してアメリカのニューブランズウィックで学ぶこととし、当時はウエスト・ポイントの陸軍士官学校への入学を希望してニューヘブレンにいました(高木不二『幕末維新期の米国留学』慶應義塾大学出版会、2015年)。

静一は書簡のなかで、熊本の元田永孚もとだながざねからの書状で細川護久による藩政改革を知らされ、その盛名が遠からず天下に轟くものと「雀躍じゃくやく」している旨を伝えています。さらに、熊本藩が設立する「英学校」(洋学校)の教師をアメリカから雇い入れるため、すでにフェリス宛に依頼があったこと、横井大平からもその人選に尽力するよう連絡があったため、及ばずながら静一自身も「探索」していると書かれてあります。この記述により、日本のフルベッ

キと大平からの依頼が、約二か月後（明治3年9月）の時点でアメリカのフェリスと静一のもとに届き、教師の人選作業が始まっていた事実がわかりました。大平は、留学中の兄左平太だけではなく、静一にも人選を依頼していたのです。熊本で洋学校の設立趣意書が制定されたのは、同年11月のことであり、アメリカでの人選作業の着手の早さがうかがえます。

本史料は、2019年度に永青文庫研究センターが古書店から購入した、旧熊本藩士幸準蔵ゆきじゅんぞうの関係史料（幸家文書）から発見されました。幸は、当時熊本藩の要職かんさつ（監察）を務め、知藩事の護久と近い距離にあったため、書簡の宛先である津田山三郎が、息子から届いた書簡を護久に見せるため、幸に渡した可能性が高いと考えられます。

以下、新発見の津田静一書簡（洋学校関係箇所）の解説文と現代語訳です。

【解説文】

此節英学校御取建ニ相成り候ニ付、当国より教師御雇入之筈ニ而、已ニフェリス迄御頼越ニ相成居候間、私共より茂人選等尽力仕候様、横井大平より申越し、被不及専ら探索仕居申候、実ニ諸事一時ニ運セられ、且如是洋学御誘ニ相成候へ者、必不日ニ賢才俊傑群り起らん乎、

【現代語訳】

このたび熊本藩による英学校の設立にあたって、アメリカより教師を雇い入れることとなりましたので、すでに熊本からフェリスまで教師人選の依頼が来ました。私たちも人選に尽力するよう、横井大平から連絡がありましたので、当方も及ばずながら探し求めています。じつに藩政改革によって諸事が一気に進展し、かつこのように洋学校の開設も進めば、数多の優れた人物たちが、すぐ育成されることでしょう。

[意義]

- 1、熊本洋学校の外国人教師の人選が、明治3年9月の時点で、アメリカで着手されていたことは、本史料の発見で初めて明らかになった事実です。また、アメリカでの教師人選に、若い熊本藩留学生（津田静一）が具体的に関与していた事実も、本史料で確定することができました。
- 2、その後、熊本洋学校の教師として来日したのは、アメリカ陸軍の退役軍人であったジェーンズですが、その赴任は、廃藩置県はいはんちけんで熊本藩が消滅した明治4年8月のことでした。ジェーンズによると、日本行きはつしんの打診が来たのは「1871年（明治4年）の春早く」のことで、決断まで時間がかかったと回想しています（フレッド・G. ノートヘルファー著／飛鳥井雅道訳『アメリカのサムライ』法政大学出版局、1991年）。つまり、洋学校の教師探しは、アメリカの地で早期に着手されながらも、その赴任まで約一年間を要

し、非常に難航した様子がかがえます。

- 3、静一は、書簡の中で、洋学校の開設により、熊本藩の人材育成が進むことに強く期待を寄せていますが、一方で、「洋学とは心を正し、身を修める学問ではなく、ただ知識を開き、修業するための学問である」とも述べています。ここからは、当時の日本人による洋学受容の基盤となった「東洋道徳・西洋芸術」という観念がみてとれます。

[用語解説]

※熊本洋学校…明治4年9月に開校した旧熊本藩立の学校。横井小楠の流れをくむ実学党によって興され、アメリカ人 L.L. ジェーンズを迎えて自然科学・地理・歴史などを教えた。明治9年8月、ジェーンズの任期切れをもって廃校となった。

[公開情報]

津田静一書簡の画像は、熊本大学附属図書館オンライン貴重資料展「廃藩置県と熊本藩」（下記ウェブサイト）で、10月27日（水）から公開予定です。

<https://www.lib.kumamoto-u.ac.jp/about/events/onlinekichoshiryo/r3>

*永青文庫研究センター

熊本大学には、「永青文庫細川家資料」（約 58,000 点）や細川家の第一家老の文書「松井家文書」（約 36,000 点）の他、家臣家や庄屋層の文書群計 10 万点あまりが寄託・所蔵されており、永青文庫研究センターではこれらの資料群について調査分析を行っています。

【お問い合わせ先】

熊本大学永青文庫研究センター

担当：准教授 今村 直樹

電話：096-342-2304

e-mail：eiseiken@kumamoto-u.ac.jp